
ごめんよ涙

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ごめんよ涙

【Nコード】

N1701Z

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

ドイツのサッカーチームからスカウトされた僕は彼女と離れたくなくて悩んでいた。けれどその彼女が僕の背中を押してくれて。トシちゃんのヒット曲からヒントを得た作品です。教師びんびん物語2の主題歌でした。

第一章

ごめんよ涙

夢だった。だから僕は今旅立つ。

行く先はドイツ、遠いあの国に旅立つ。

ドイツに行く目的はサッカーだった。僕は物心ついてからサッカーばかりしていた。

高校で注目されてそして。何とドイツからスカウトが来た。

その話を聞いてだった。僕は。

最初はかなり戸惑った。しかしだった。

どうしていいかわからなかった。まさかドイツからスカウトが来るなんて思わなかった。大学を受験しようと思っていた。スポーツ推薦でいけるのは間違いなかった。

けれどそれでもだった。サッカーでも世界的に有名なドイツから話が来るなんて本当に夢にも思わなかった。それでだった。

受けるべきか受けないべきか本気で悩んだ。そしてだった。

彼女にも。何度も相談した。

中学校の頃からの付き合いだった。子供同士の付き合いみたいな感じからはじまってだった。高校になっても交際を続けていた。

その彼女に。僕は本当に何度も相談した。

この日もだった。誰もいなくなつた、白い砂浜で。僕達は話をした。

「ドイツだけだね」

「まだ迷ってるの？」

「うん。それもプロチームね」

「凄い話よね。あのドイツのプロチームからって」

「本当に信じられないよ」

砂浜を二人で歩いて話していく。もう秋になった砂浜で。

「僕なんかがさ。」リーグの人でも滅多にない話なのに」

「だから余計によね」

「うん、どうしたらいいのかな」

真剣に考え続けて。本当に悩んでいた。

それだった。横にいてくれる彼女に話した。

「ドイツに行くべきかな。けれどドイツに行ったら」

「ドイツに行ったら？」

「御別れだよね」

彼女の。その可愛らしい顔を見て。僕は言った。

「君とも。それで」

「ドイツだからね」

「ドイツは遠いから」

本当に遠い。まるで別の世界だった。

「そんなところに行ったらもう」

「会うどころか」

「御別れだから」

そう思うと。ドイツに行きたい気持ちはあっても。

「行くことは」

「できないのね」

「行きたいよ、本当に」

この気持ちは本当だった。切実だった。

「プロになるのは夢だし。それに」

「ドイツからのスカウトだから」

「凄い話だよ、信じられない位嬉しいよ」

何度も夢だと思った。こんな話あるのかとさえ思った。

けれどそれでも。ずっと一緒にいる彼女のことを思うと。家族のことも思ったけれどまず第一はこの娘のことだった。それはどうしても。

躊躇、この言葉を思い出した。思い出さずにはいらなかった。

「それでも。本当に」

「迷うのね」

「ドイツ、行きたいよ」

僕は心から行った。前を見て。

「けれど。そうしたら」

「ねえ」

その僕に。彼女はここでこう言ってきた。

「待つから」

「待つって？」

「日本に。帰ってくるわよね」

こうだ。僕に言ってきてくれた。

「そうするわよね」

「うん、それで日本のJリーグだね」

サッカーをする。それが僕の第一の夢だ。そのことも隠さなかった。

「サッカーするよ。絶対に」

「じゃあ。待つから」

僕の方を見て。微笑んでくれたの言葉だった。

第二章

「その間ずっと待つから」

「待ってくれるっていうと」

「ドイツに行って来たらいいわ」

微笑んでくれたまま。僕に話してくれてきていた。

「そうしたらどうかしら」

「ドイツに。行って来ていいの？」

「何年でも待つから」

笑顔だった。僕が今まで見た中で一番綺麗な笑顔だった。

その笑顔で。僕の背中を押してくれた。それを受けて。

僕も。迷いが残っていたのは事実だけれどそれでもだった。頷いてから答えられた。

「うん。それじゃあ」

「ドイツに行くのね」

「そうするよ。けれど」

彼女の顔を見て。それで言う言葉は。

「御免ね」

「何で謝るの？」

「待ってくれるよね、何年も」

「そうさせてもらうわ」

「だから。御免」

本当に申し訳なかった。だからこそ彼女に謝った。

「その間。ずっと」

「いいから。それでね」

「それで？」

「ドイツの何処のチームなの？」

「チューリンゲンのチームだよ」

スカウトの人はそこから来た人だった。かつて東ドイツだった地

域らしい。僕の生まれる前にドイツは統一されたと歴史の授業で聞いている。

「そこに行くんだ」

「チューリンゲンなのね」

「そう、そこにね」

「わかったわ。それじゃあね」

「うん、行って来るよ」

こう告げてだった。僕はドイツに行くことを決意した。そして空港でドイツに旅立つ時に。彼女は僕にこう笑顔で言ってくれた。

「じゃあ行ってらっしゃい」

「うん、活躍してくるから」

「ニユース。楽しみにしてるからね」

満面の笑顔で僕を送り出してくれた。これが御別れだった。僕はドイツに旅立った。

ドイツに入りだ。そしてだった。

プロチームに入って頑張った。やっぱりプロチーム、しかもサッカーの本場欧州でも強豪のドイツのチームだ。レベルはかなり高かった。

練習についていくだけでも必死だった。それでもだ。

僕は何とか頑張っていた。そうして頑張っているとだ。

監督やコーチ、先輩達にも認められていつて。二軍の試合にも出られる様になった。

そうなると練習にも身が入る。それでこの日もグラウンドで練習をしていた。その僕にだった。

先輩の人、ドイツ生まれのその人がだ。ドイツ語で僕に声をかけてくれた。ドイツ語もかなり覚えてきた。こっちの勉強もドイツの文化のを知るのかなり苦労した。

そうして一年が過ぎていた頃にだ。声をかけられたのだ。

「おい、会いたい人が来てるぜ」

「僕にですか？」

「ああ、御前にな」

こう聞いてまず僕は。

首を捻った。誰なのかと思った。それで先輩に尋ね返した。

「誰ですか？それで」

「アジア系だったな。女の子だな」

「アジア系ですか」

「ああ、御前のファンだと思うけれどな」

僕のことは日本でも有名になっていっただろう。ドイツのプロチームにスカウトされて頑張っている選手として。それでらしい。

そのせいか時々日本から会いたいという人が来てくれる。僕にとっては嬉しいことだ。

それでだ。最初はこう思った。

「ファンの人だったら」

「サインだな」

「ちよつとサインペン持って行きますね」

「人気者は辛いな」

先輩は笑顔で軽いジョークも送ってくれた。

「それも日本の可愛い女の子なんてな」

「可愛いですか？日本の女の子は」

「じゃあ可愛くないのか？」

先輩は笑ってこつとも言ってきた。

「日本の女の子は」

「いえ、まあそれは」

「メイド喫茶つてあるよな」

先輩は今度はこれを出してきた。どうも外国でもメイド喫茶は有名になってるらしい。少なくともドイツ、チューリンゲンでは見たことがない。

第三章

「あれはいいよな」

「僕行つたことないんで」

「おい、日本人でメイド喫茶行つたことないのか!？」

「高校生だったんですよ」

僕が言うのはこのことからだった。

「それで何でそうしたお店に」

「高校生は駄目なのか、日本じゃ」

「校則でそうした場所に行くことは禁止されてました」

「厳しい学校だったんだな、随分」

「ドイツでもそうじゃないんですか？」

「そう言われればそうか」 126

先輩とそんな話をしたうえでだった。僕は先輩に案内されてその日本人の娘が来ている場所に向かった。そこはグラウンドの正門のところだった。

そこにいるとだ。何とだ。

彼女がいた。信じられないことに。

その彼女を見て。僕は啞然となった。それでだ。

言葉を出そうとしても出せない。驚き過ぎて。

けれどその僕に。彼女は笑顔で言ってくれた。

「来ちゃった」

「来ちゃったって」

「御免ね、待つって言っただけけど」

それでもだと。照れ臭そうに笑って僕に言ってくる。

「待てなくて。それでね」

「ドイツに来たんだ」

「ドイツの。チューリンゲンの大学にね」

この場所のその大学にだった。

「留学することにしたの」

「それでここにいるんだ」

「ええ、そうなの」

「まさかと思つたけれど」

「驚いたわよね」

「驚いたなんてものじゃないよ」

我が目を疑つた。本当に。

「こんな思い切つたことするなんて」

「驚かせて御免ね」

彼女がまた謝つてきた。

「本当にね」

「いいよ。けれど」

「けれど？」

「あの時は僕が謝つて」

それで今度はだつた。

「君も謝つて。何かおかしいよね」

「そうね。それでも今はね」

「一緒にいられるね、また」

僕はこう言つた。言つとそのそばから。

嬉しいせいか。目から涙が出て来た。そしてそれは彼女も同じで。

二人で嬉し泣きをしながら。こう言い合つた。

「じゃあこれからも」

「宜しくね」

僕達は二人で言い合い。そうして。

笑顔で手を握り合つた。その僕達を見て先輩も笑顔になって。こ
う言つてくれた。

「よかったな。これからは二人だな」

離れ離れになつたけれどそれが元に戻つて。彼女が来てくれて。

それで握り合つた手はとても温かかった。今の涙もとても熱いと
感じられた。

ごめんよ涙

完

2
0
1
1
・
1
2
・
5

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1701z/>

ごめんよ涙

2011年12月6日00時46分発行